研究ノート
『演劇作法』の注に関して

浅谷真弓

ラシーヌを数少ない例外に、当時のギリシアはラテン語の知識を通じてのギリシアであった、[1]とされる。今回、戸張智雄訳『演劇作法』の脚注を作るにあたり、特に参照を指示されたギリシア、ラテンの著者、著作にいくつかの疑問が生じた。当方の力不足がその主な原因ではあろうが、この機会に問題点をまとめておきたい。

1)アリストテレス、《詩学》ほか原注および本文中の引用、参照指示

アリストテレスからの引用は57回に及ぶといわれるが、[2]その中には原注において指示された章と、近代版で確かめ得る内容とがずれている、指示自体がない、引用に適するよう相当に解釈、再構成されたもの等がある。[3]ドービニャックが使用した版、ラテン語訳と邦訳の底本とは学問的確度に差があるのは当然だが、疑問点は第3部に集中している。第3部第2章、第3章、第4章はアリストテレスの教義による挿話について、近代人の意見に反駁し、古代の俳優あるいは最初の挿話の朗誦者について、合唱隊について、[4]述べられた章である。挿話は、古典古代演劇でエペイソディオンと名付けられ、主筋の付随的逸脱ではない。主筋を各幕に分割し、その各幕が古代人の言うエペイソディオンであるとの論旨は明確である。だからかえって参照箇所の不明確さが際立つ。指示章と近代版の内容とのずれは別とし、またアリストテレスの祖述をするつもりはない、と宣言しているのを考慮しても、標榜するところの合理性の篩にかけるべき最初の収穫が何物であるかを明示しないのは奇異の感を免れない。マルティノ版により原注の疑問点を列挙すると、第3部第2章171頁(解釈、再構成されて参照箇所が特定不能。)、179頁(同)、181頁(近代版と異なった章の指示。)、第3章193頁(指示章がない。)、193頁(近代版と異なった章の指示。)、第4章197頁(同)、199頁(同)、205頁(指示章がない。)、228頁(同)、である。

同様に、本文中の参照指示にもある。アリストテレスによれば、と参照を指示しながら原注に出所を明示しない、逆に著者を示さずに《詩学》から引いたと思われるのは、主要なだけでも計33箇所あり、大半が近代版によって同定が可能である。これらを近代版《詩学》の原文行数で確認すると、1452.b.が最多の9回、1449.b.がそれに次ぐ5回、1486.b.、1449.a.、1455.b.が各3回、1451.b.、1456.a.、1460.a.が2回、以下1450.b.1451.a.1452.a.1459.b.が1回である。最多9回の参照は、

逆転、認知、苦難について述べた第 11 章の半ばから、悲劇作品の部分についての第 12 章、物語における人物設定と運命の転換に関する諸原則の第 13 章までにあたる。章毎の分類では第 12 章が圧倒的に多く、全体の三分の一、11 回に上る。

一方、当然《詩学》から引けるのに、《問題集》第 19 節 49 問と指示されている原注が第 3 部第 4 章にある。スカリジェの引用と併記され、孫引きの可能性があるが、近代版第 18 章 1456.a. の内容に合う。ベッカー版に拠る戸塚七郎の邦訳《問題集》の第 19 巻は、音楽的調和に関する諸問題を扱い、うち第 49 問は柔らかい音声が低い調子の中にある理由を述べ、コロスの記述ではない。Problemata Physica と称する現存の《問題集》はアリストテレス自身の著作ではなく、ペリパトス派の複数が編纂した二つの問題集の一つで、共に、プルタルコス、ガレノス、アウルス・ゲリウス、アプレイウス、アポロニオス、アテナイオスに引用がある。想定される先行、真正の《問題集》の他に散逸した多数の問題集が存在し、その例に、ディドー版、Problemata inedita 全四巻があげられる。同様に、第 3 部第 3 章原注《問題集》第 30 巻第 10 問の指示、詩人すなわち踊り手と呼ばれた、とする説は現存近代版にはなく、ディオニュソス祭礼の芸人の品性が下劣である理由を問う。アウルス・ゲリウス(N.A.XX)[4]にこの項の引用がある。

しかし、次の二点に関しては著者の単純な不注意であろう。一つは、第 2 部第 2 章の、はじめて一人の俳優を加えたのがテスピスであるという説で、これは《詩学》にはなく、著者自身別の場所で参照しているホラティウスの《詩法》とディオゲネス・ラエルティオスのプラトン伝、プルタルコスのソローン伝にある。特にプラトン伝は後述するように度々引用、参照指示されるから、ここでアリストテレスをあげて根拠付けようとする理由が理解できない。もう一つは、第 3 部第 10 章、その時代の狂気のうちにしか詩を作ることができない詩人の例を示す、とした部分で、プラトンの対話篇《イオン》(533E/534B)中に読める。[5]偶然か、どちらもプラトン絡みである。

上にあげた以外の殆どの原注は近代版、邦訳によって検証可能で、全体に占めるずれや錯誤の割合は些少であるが、自説の根拠の一方の極にばらつきがあるのは気に掛かる。メナージュと三十年に亙る論争を展開した著者にしてはいかにも中途半端であろう。この印象はドービニャックの特殊事情と言えるのか、同時代の理論家に共通なのか。

尚、マルティノ版で合本され、演劇批判を反駁する『フランス演劇の再建試案』にはアリストテレスの引用、参照指示はない。キリスト教護教論の立場を最大限に利用し、アリストテレスという名前がマイナス・イメージを負荷され、注意深く避けられているようだ。[6]

2)ホラティウス《詩法》

《四大詩学》の中で、年代から見てアリストテレスに次いで参照されただろうホラティウスの《詩法》の引用、参照指示は、第 1 部で 1 回、第 2 部で 3 回、第 3 部で 8 回、第 4 部で 2 回の合

計 14 回である。ボワローはまだなく、ヴィダ(1490/1566)は名のみで直接引かれることがないから、相対的多寡はスカリジェ等アリストテレス学者との比較になるが、ラテン語を使用して原典にあたれたとすれば、どうか。

本文中での《詩法》の初出は第 1 部第 4 章で、アリストテレスの直後である。(ちなみにヴィダは同第 5 章のホラティウスの直後にその名前だけ。)アリストテレスの出典が原注で大部分明示されるのに対し、ホラティウスは淡泊な扱いを受けている。原注の参照箇所の明示は同第 5 章の 1 回きりである。それも本文中の見出し語は、理論の研究に次いで、とされており、ホラティウスの名前は出ない。268 節とだけ記す。他に原注にホラティウスの《詩法》が指示された回数は 3 回だが、参照箇所を明示しない。残りはすべて原注に出さず、ホラティウスによれば、と参照を促すのみ。

主要な参照箇所は、[7]登場人物、主題と文体の適合、伝説等に取材した登場人物の性格の再現、作品の長さ、コロスの役割、悲劇の創始者としてのテスピスと改革者アイスキュロスの 5 箇所に大別される。特に『作法』第 3 部の参照指示はコロスの役割、テスピスとアイスキュロスの関係に集約できる。鈴木一郎の解題に従って《詩法》を類別すると、I.が詩作の一般的法則、II.が劇詩に関するメモ、III.が作家論であるから、ここで参照を指示された部分は殆どが II.にある。内訳は、性格描写、演出の適正、脚本の長さ、俳優の数、コロスと音楽の使い方、サテュロス劇の書き方、韻律論、ギリシアのものを手本とすべきこと、となっている。また、『作法』第 1 部第 5 章の唯一の原注の、本文中の参照指示が理論の研究に次いで、とされているのを見ると、ドービニャックはホラティウスの I.に(言うところの)理論を、II.に具体的作法を重ねていたようだ。改めて『作法』の構成を思い出してみると、[8]第 1 部は総論、第 2 部は真実らしさと三単一の説明、第 3 部は劇作の組み立て、第 4 部は劇の表現を論じている。牽強附会のアリストテレス[9]同様、全体の構成方法に関しては、ホラティウスの千変万化、支離滅裂[10]がドービニャックとの親近性を見せる。

3)プルタルコス

プルタルコスからの引用は《モラリア》と対比列伝(英雄伝各伝)による。プルタルコスの初出は第 1 部第 5 章のアリストテレス注解者たちの直後にある。《モラリア》は普通、倫理論集と訳されているが、ドービニャックが原注にあげるのは、当時流行した饗宴形式によって書かれた部分である。原題は Symposiaka(Problemata) で、宴会で議論されたいろいろなことども、というから、[11]文字通り饗宴と訳して差し支えないところ、邦訳は『食卓歓談集』として知られる。全体は 9 巻で各巻 10 個のテーマが問いの形で割り振られ、第 9 巻のみ 15 問の構成になっており、このうち第 4 巻第 6 問後半から第 10 問までと、第 9 巻第 6 問始めから第 12 問の終わりころまでが散逸している。『作法』第 2 部第 10 章で始めて原注で参照指示が行われ、第 7 巻第 8 問

と同第 15 問とある。しかし、上に見たように、第 9 巻を除いては各 10 問で構成されているのに照らすと、後者の第 15 問の指示には近代版とのずれがある。第 3 部第 2 章の原注指示は同第 9 巻第 1 問、第 1 巻第 1 問の二つである。第 1 巻第 1 問は邦訳にも紹介されていて、内容を確かめられる。問題は、第 3 部第 2 章で、このプルタルコスのしばらく後で参照指示を行っている本文中の、バッコスにかかわりなし、という決まり文句に生じる。著者は原注においてこの出典をスイダス、スーダ事典の prob.cent.n.20.とするが、『歓談集』第 1 巻の序の終わり(612E)と第 1 巻第 1 問のフリュニコスとアイスキュロスの例示(615A)に、ディオニュソスに関わりなし、として紹介されている。スイダスの成立は 10 世紀頃の東ローマ帝国と推定され、プルタルコスよりかなり年代を下っている。著者はスイダスに含まれる 6 世紀のヘシュキオスのギリシア語辞典の抄録を使用した模様で、ディオニュソス(ギリシア名)がバッコス(ローマ名)に翻訳された経緯を知らぬ訳はない。第 1 巻第 1 問を指示しながら、初出のその序文を読んでいなかったというのも不可解だ。プルタルコスもラテン語、フランス語の翻訳を読んだか、または底本に差異があったと考えられる。

残る原注での参照指示はもう一つだけで、第 3 部第 4 章での《ディオン》である。節の指示はない。対比列伝のディオーン伝中、若き日のプラトンに対して彼がコロスの費用のパトロンになったことを書いた 17 節と思われるが、原注に列挙されるように、ディオゲネス・ラエルティオス等にもあり、特にプルタルコスに限定しない。

原注に出ない、本文中の対比列伝の参照指示には、第 4 部第 1 章のフォーキオン伝がある。質素で有名だったフォーキオン夫妻の、妻がお供を連れずに市中を歩くさまを、舞台上の端役の少ない事の言い訳にしたという 19 節を引く。本文に節の指示はない。第 4 部第 5 章のカトー一族の不幸の例も列伝中にあるが、これには何の参照指示もない。一般化、常識化した例であったか。列伝では小カトー伝はフォーキオン伝の直後にある。

その他、第 1 部第 1 章冒頭のシュラクサイでのアテナイ遠征軍潰滅に関する故事はトゥキュディデスの《戦史》になく、むしろプルタルコスのアゲーシラーオス伝にあるスパルタ市民の行動を想起させる。ギュムノパイディアイ祭開催中の、演劇の競演が行われている劇場にレウクトラでの敗北が告げられたが、市民はまったく動揺せずに予定行事一切を済ませ、列席の外国使節を驚嘆させた。同じく、清貧をすすめた幸福観はデメトリオス伝中の、出典不明のプラトンの説に似る。

対比列伝を参照したと思われる主な例示には、ヌマ伝喜劇作者エピカルモス、ソローン伝テスピス、テミストクレース伝フリュニコス、アルキビアデースとコリオラーヌス比較ディオニュシオス、ディオーン、フィロポメーン伝ピュラデス、スラ伝リューシス、キケロー伝ロスキウス、アエソプス、ブルートゥス伝ラベオ父子等がある。[12)]

《モラリア》を参照したと思われる例示には、第2部第10章のクレオメネス、タレタス、第3部第4章のアガトンがある。2世紀後半から3世紀のローマの著述家アイリアノスを通して知ることができる、《モラリア》の断片番号223.A.、1146.B.、177.A.B.と符合する。(アガトンはアルキビアデース伝にもある。)列伝はもとより、《モラリア》についても、エラスムス、ビュデ、アミヨを通じて深く浸透していたらしいから、[13]アイリアノスを加える必要はなかろうが、第3部第4章でのアイリアノスの参照指示がアガトンのそれと至近であることが目を引いた。

4)アテナイオス

アテナイオスの初出は『作法』第1部第5章のプルタルコスの直後で、共に演劇の専門書ではないが参考にする、といった紹介がある。実際の参照指示は第2部第10章まで待たねばならない。原題 Deipnosophistae は邦訳『食卓の賢人たち』として知られ、『歓談集』同様、饗宴の形を取るが、長口舌、多数の文献の引用のため、形式破綻している。全15巻から成り、第1巻から第3巻のはじめまでは散逸し、後世の抜粋、要約のみがある。[14]原注での参照指示は、第2部第10章で4回、第3部第2章で2回、第3部第3章で1回の合計7回である。それぞれ順に、第14巻、第15巻8、第11巻596、第1巻75、第1巻12、第2巻、第9巻、第5巻13、第9巻があがっている。後世の抜粋、要約を読んだと思われる第1巻、第2巻が3回、第9巻が2回、その他第5巻、第11巻、第14巻、第15巻が各1回となっている。(同時複数指示があるため。)残念ながら邦訳によって確かめ得る内容の指示箇所はないが、第2部第10章の原注、滑稽歌手の直前の、マジュディーについては、O.C.D.のマゴディア Magodia の項目にストラボンと共に参照指示があり、第14巻620.とされる。原注、パントミモス役者バティルス、ピュラデスはプルタルコス『歓談集』第7巻第8問、食卓にはどんな聴きものが向くか、にもある。

参照指示がなく、アテナイオスで知ることができるのは、第2部第10章アリストクレス、第3部第2章カマイレオン、第3部第8章アリストクセノス等で、前二者は第14巻623E./628F.に、後者は第14巻632F.にあって、アリストクレスの著書として《合唱について》、アリストクセノスの著書として《饗宴雑記》が引用されている。

尚、アリストクレス(前1世紀/後1世紀)は後述のエウセビオスによって断片が知られるのみの同名のペリパトス派の哲学者(2世紀後半/3世紀始め)とは年代が隔たる。

第3部第2章オリュントスのエピッポスによるアレクサンドロス大王の逸話と第3部第8章ピュティア曲はアテナイオスの同じ第12巻537D./540.に収められている。一読してわかるように、アレクサンドロスがエウリピデスの《アンドロメダー》の一節を朗唱したのはある日の宴会に於いてであって、生涯最後のではない。プルタルコスのアレクサンドロス伝、《アンドロマケ》に関する逸話と混同された可能性がある。エウリピデスの《アンドロメダー》は伝エラ

ストテネス(前 276 頃/前 195 頃)、アリストパネス(前 257/前 180)、ストバイオス(5 世紀)に引用される断片のみが現存する作品で、アレクサンドロス(前 356/前 323)がこの作品を知っていたとすれば、エウリピデス(前 480 頃/前 406 頃)の年代から見て、引用文献より相当に早い時期だったことになる。膨大な原典は、[15]古典古代の知識を得るに恰好の材料であったろう。□

5)ディオゲネス・ラエルティオス

ディオゲネス・ラエルティオスの初出は、第 3 部第 2 章の原注で、原注の参照指示はここでの 5 回に集中する。すべて全体をプラトン伝によって構成する第 3 巻中、第 1 章 56 節にある。[16]内容は、コロスの初期段階の役割、登場人物の数についてのテスピス、アイスキュロス、ソポクレスらの改革、悲劇の競演が行われた四つの祭、サテュロス劇、テトラロギアー(四部作)等。実際、『作法』第 3 部第 2 章原注は、順に、悲劇が当初はコロスだけで演じられたことを繰り返し 2 回、テトラロギアー、アイスキュロス、ソポクレス各 1 回である。これは参照指示がない第 2 部第 3 章の盛大な四大祭、テトラロギアーの定義、第 2 部第 10 章キュトロイ祭、第 3 部第 3 章のテスピスについても見える。他に、参照指示がなく、プラトン伝にあるのは、第 3 部第 4 章の、直後に原注でのアテナイオスの参照指示があるプラトンが若い頃に悲劇を作ったという第 3 巻第 1 章 4 節、5 節である。

プラトン伝以外では、第 1 部第 1 章の幸福観が第 10 巻エピクロス、第 2 部第 10 章エンペドクレスが第 8 巻第 2 章 51 節、77 節、同ヘゲシアスが第 2 巻第 8 章アリステイッポス、第 6 巻第 2 章ディオゲネス、第 4 部第 5 章ギリシアの七賢人が第 1 巻序章 13 節以降及び第 1 巻第 1 章 22 節タレスがある。特徴的なのは、原注が第 3 巻第 1 章 56 節に偏ることである。テスピスに関する記述がアリストテレスに取り違えられたり、プルタルコスが紹介する出所不明のプラトンの幸福観、対話篇《イオン》の一節が唐突に引かれる等、プラトンについての参考書または事典の存在が疑われるところである。

6)アイリアノス

アイリアノス Claudius Aelianus(170/235) はローマの文人で、一般に『ギリシア奇談集』として知られ、ギリシア語で書かれた《Poikile Historia》、ラテン名《Varia Historia》全 14 巻の著者。先行群書から古今の名士、名将の逸話、珍談、奇談を収集した。[17]

『作法』初出は第 3 部第 4 章の原注、ディオンとプラトンの関係だが、最後でもある。第 2 巻第 30 章に読める。ディオンのことは出ていず、ソクラテスと出会う前後のプラトンについてのみ書かれている。邦訳の参照指示に、『作法』同様、アプレイウス、ディオゲネス・ラエルティオスがある。[18]

プルタルコスの《モラリア》に含まれる人名中、アイリアノスに見えるのは、第2部第10章クレオメネス、タレタス、第3部第4章アガトン等で、《モラリア》223.A.クレオメネスが第13巻第19章、1146.B.タレタスが第12巻第50章、117.A.B.アガトンが第2巻第21章、第13巻第4章、第14巻第3章にそれぞれ対応する。

他に第1部第1章エピクロスの幸福観、第2部第1章エンペドクレス、第3部第8章アリストクセノス、オリュンポス、第4部第5章七賢人。邦訳者があげる出典はアテナイオス、プルタルコス、ディオゲネス・ラエルティオス、プリニウス等だが、アイリアノス自身の伝記的データは同時代のフィロストラトスの《ソフィスト列伝》、スイダスとのことで、それらすべてを参照したか、あるいはスイダスだけによるかは不明である。原著者はギリシア語で書いたが、ローマ市民権を持っていたらしく、ラテン語訳の存在も疑われる。ドービニャックがギリシア語原典を参照したとすれば問題はない。

7)ローマの非キリスト教系著者[19)]

原注での参照指示は、第1部第1章のペトロニウス、スエトニウス、マルティアリス、スタティウス、ユヴェナリス、アプレイウスと続く。第1部第8章のアティリウスはカエキリウス(前167年頃)の同時代人。第2部第10章にカシオドルス、セネカ、シドニウス・アポリナリス、マクロビウス、第3部第2章にヒギヌス、ウェルギリウス、テュロスのマクシモス、ソリヌス、ユリウス・ポリュックス(ポリュデウケス)、ヘラクレアのディオゲニアヌス、同第3章にフィロストラトス、アスコニウス、ポルフュリオス、リウィウス・アンドロニクス、ルキアノス、同第6章にプリニウス、ウルピアヌス、第4部第7章にルカヌスが引かれる。このうち、テュロスのマクシモスとフィロストラトスはギリシア系のソフィスト、ポルフュリオスはシリア生まれの新プラトン派ギリシア哲学者、アンドロニクスはギリシア語原典のラテン語訳者で、共にローマを活動拠点とした。また、マクロビウスは《サトゥルナリア》にプルタルコス『歓談集』の直接間接の引用がある。[20)]

本文中に名前が上がるのは、ウァロ、キケロ、クインティリアヌス、アウルス・ゲルス(ゲリウス)、ウォルカティウス、セルウィウス、オウィディウス等で、その他ローマ皇帝に関係する大半がこれらによると思われる。第1部第1章模擬海戦、戦車競争、第2部第1章メッサリーナの行状、(再建試案、ローマ皇帝の演劇改革)はスエトニウスで知ることができるが、第2部第2章ネロのアグリッピーナ殺害の詳細はネロ伝34節にない。[21)]何故か参照されない、タキトゥス《年代記》第14巻第1章8節及び9節は、棍棒で頭部を打った後、アグリッピーナ本人が下腹を示し、そこを刺すように命じた刺殺説を取り、その遺骸に関してネロが述べたという感想については

信憑性が低いとする。ディオーンは遺骸の美しいのを称えた、と伝える。セネカふうの、あるいはアイスキュロス《供養する女たち》でオレステスに乳房を示して命乞いしつつ刺殺されるクリュタイメストラ、エウリピデス《ヒッポリュトス》で縊死するパイドラを想起させる状況ではある。

第 4 部第 3 章オウィディウスによるケユクスとアルキュオネの変身譚は近代版の章分けとずれている。[22]アプレイウス、ポルフュリオス、ウェルギリウス、キケロ、ウァロ、ローマのルディに関しては、アウグスティヌスが特にローマの祭祀と演劇に対して激しい批判を展開する『神の国』第 1 部第 2 巻、第 3 巻、第 6 巻等に詳しい。

8)その他の非キリスト教系著者

原注に出る主要な著者は、第 2 部第 10 章テオフラストス、第 3 部第 2 章アポロニオス、ディオメデス、第 3 部第 3 章ディオドロス、デモステネス等。考えられるアポロニオスには 1 世紀アレクサンドリアの文法家で、ホメロス語彙集を作ったソピステスと、2 世紀アレクサンドリアの文法家、ディスコレスがいる。ディオメデスも 400 年頃の文法家で、同時代のカリシウスの《文法原理》を引き写した。ディオドロスは前 1 世紀末のシリアの歴史家、《Bibliotheke》(世界史)として知られる古代エジプト、インド、メソポタミアからカエサルのガリア遠征までを書いた全 40 巻の著者。古代の資料を多数含み、第 1 巻から第 5 巻、第 11 巻から第 20 巻が残る。また第 2 部第 10 章の本文中には、プラトンとデメトリウス・ファレスの名前があげられている。ファレロンのデメトリウスはテオフラストスの弟子、文学者、政治家、アテナイ総督で、アルコン名簿の整理をはじめ多岐に亙る著作があり、アレクサンドリア図書館建設に尽力した。共通項は強いて言えば、アレクサンドリア、ビザンティンを経由するという点であろう。

9)事典、辞書の著者

原注に出る主要書は、第 2 部第 10 章語源辞典、スイダス(スーダ)、フェストゥス、ヘシュキオス、ステファヌス、第 3 部第 2 章(共に前出)ユリウス・ポリュックス、ヘラクレアのディオゲニアヌスが、マルティノの脚注には第 3 部第 8 章ジャン・スカプラがある。

ギリシア語源を扱う語源辞典は 9 世紀に、また人名と誤認されたらしい、[23]古代ギリシア大百科事典の趣があるスイダスは 10 世紀にビザンティンで成立した。5 世紀、6 世紀の両ヘシュキオスの古代ギリシア方言を含む辞書はスイダスの抄録と、15 世紀の写本をムスルスが編集した 1514 年版によって知ることができ、ヘラクレアのディオゲニアヌスがハドリアヌス帝時代の資料を収集した通称パンフィリウスの用語集全 5 巻はヴェスティヌスが要約し、ヘシュキオスが梗概を作成した。これらの事典、辞書は相互に複雑に絡み合っているわけである。

ユリウス・ポリュックスは《Onomasticon》の著者だが、場所によりポリュデイケスのギリシア名で参照指示がある。ステファヌスに関してはラテン語を扱う父ロベール・エティエンヌの1532年版か、ギリシア語を扱う息子アンリ・エティエンヌの1572年版か不明だ。他に、優秀な写本を参照し、それまでの研究成果を踏まえて1572年にプルタルコス全集を刊行している。[24]尚、脚注のジャン・スカプラの《Lexicon graeco-latium》は度々再版されたとは言いながら、1679年版とあるのは信憑性に欠けよう。

問題はフェストゥスの指示で、正式にはフェストゥス・セクストゥス・ポンペイウス・ヴェリウス・フラクスと呼ばれる辞書と思われる。最後のヴェリウス・フラクスはアウグストゥス帝時代の解放奴隷で、文学者、教師として知られ、アルファベット順にラテン語、古代ローマ語の解説を行った百科全書的な《De Verborum Significatu》を書いた。この原著は失われ、2世紀後半にセクストゥス・ポンペイウス・フェストゥスが摘要を編集し、8世紀にパウルス・ディアヌコスがその摘要の梗概を作成して伝わる。アウグスティヌスが何度かその語源辞典を引用している。別にセクストゥス・ポンペイウスを指示することもあり、この間の事情を考え合わせると、ドービニャックが原著を参照した可能性は極めて低いだろう。

10)キリスト教系著者

アウグスティヌスを別格に、キリスト教系の著者の原注参照指示は、第1部第1章コンスタンティノープル大司教クシフィリノス(1075没)、第2部第2章新プラトン派、プトレマイオス司教キュレネのシネシウス(370/413)、同第10章シリアキリスト教グノーシス派異端代表者、サトゥルニヌス(2世紀前半)、第3部第2章テッサロニカ大司教ユスタティウス(1175/1192)、改宗異教徒アレクサンドリアのクレメンス(150頃/211、216)と、意外に少ない。ユスタティウスはアエリウス・ディオニュシオスのアッティカ語の辞書、ホメロス抄録等の著書があり、アレクサンドリアのクレメンスはキリスト教哲学への多数の入門書の著者、またプルタルコスの愛読者でもあった。[25]

本文中参照指示は、第2部第2章マンブラン神父(イエズス会士)、第2部第10章アクィレイアのルフィヌスの二人程度。アクィレイアのルフィヌス(345/410)は多数のギリシア語文献のラテン語翻訳者、特にエウセビオスの《教会史》の翻訳とオリゲネス、バシレイウスを含む二巻の補足を残した、聖ジェロームの同時代人である。

エウセビオスは、彼の《福音の準備》第14巻第18章2、3節に採録された断片によってのみ知られるペリパトス派の哲学者アリストクレス、度々引用するという2世紀頃の反クリュシッポスの論客、エピクロス派に属すディオゲニアヌスの名前と共に、『作法』の背後に見え隠れする著者のひとりである。265年頃パレスティナに生まれ、313年カイサレアの司教に就任、340年

頃没した。通称、カイサレアのエウセビオスと呼ばれる。アレクサンドリア学派から受け継いだ豊富な知識によって護教論、聖書解釈に活躍し、その《教会史》全 10 巻は初代教会から 324 年までの歴史に関して最も貴重な文献となっており、のちの教会史の範を示した。312 年以降に書かれたと推定される《福音の準備》はギリシア哲学を批判、攻撃するが、そのうちの最良のものであるプラトン哲学は聖書の原理に近いとした。[26]ドービニャックがルフィヌスを通してエウセビオスを知ったとすれば、ギリシア哲学、少なくともプラトン哲学に対する態度のいくらかは、これに由来するかもしれない。

再建試案本文は初期護教家ミヌキウス・フェリクス(2/3 世紀)、テルトゥリアヌス(150/240)、キュプリアヌス(200/258)、ラクタンティウス(250/330)、アウグスティヌスがある。

11)アウグスティヌス

『作法』の原注、本文中にアウグスティヌスの参照指示はない。『再建試案』には他の護教論者と共に名前があがるが、具体的な文献を示唆するわけではない。しかし、第 1 部第 8 章ウェルギリウス、第 2 部第 1 章ウァロ(ウァルロ)、第 2 部第 10 章キケロ等はアウグスティヌスの『神の国』においても重要な引用、参照文献となっている。[27]特にウァロの失われた著作が第 6 巻以降、異教神学批判の源泉とされ、反駁のためとはいえ貴重な抄録を行っている。第 6 巻第 2 章、第 3 章に示されるアウグスティヌスのウァロに対する尊敬は非常に大きい。

ドービニャックがウァロを名ざす場合、直ちに『神の国』の反駁を示唆するとは言えないが、その可能性は非常に高いであろう。『神の国』第 1 巻に集約されるアウグスティヌス自身のギリシア、ローマ古典古代演劇の概観とそれに対する態度は、『作法』の古典古代演劇の知識の幅や演劇擁護の論法から見るに、その基礎となり、想定問答の相手となるに相応と思われるからである。また、(ウァロの評価によるところが大きい)プラトンの評価においても、前出のエウセビオスと同様、ギリシア哲学者中破格の扱いである。『作法』のプラトンをめぐってはいくつか疑問点があり、前に述べた通りである。また、『神の国』第 7 巻、第 8 巻以降では、『試案』にあがる各教父、アプレイウスの『ソクラテスのダエモンについて』、ポルフュリオスによるプロティノスの『エネアデス』が頻繁に現れる。

ウァロ、アプレイウス、ポルフュリオスのみをあげて、アウグスティヌスの存在を示さない。立場上、擁護の矛先を直接教父にむけることを憚ったのだろうか。

12)その他の著者

アリストテレス注解者は多数引用されている。主要な著者は第1部第5章初出スカリジェ父(1484/1558)、ヘインシウス(1580/1609)、ウォッシウス(1577/1649)、第2部第7章、第8章初出ウィクトリウス(1499/1585)等である。前世代、あるいはほぼ同世代では、ヘインシウスが 1610 年、1611年に、ウォッシウスが1647年にそれぞれアリストテレスのラテン語訳と注解を出している。

多数引用、参照されるテレンティウスの注解者にドナトゥスがいる。このドナトゥスは、ラテン文法家で『アエネイス』注解によって知られる 4 世紀末のティベリウス・クラウディウスではなく、その前世代、4 世紀中頃に活躍した、同じくラテン文法家、修辞学者のアエリウスと思われる。アエリウスはテレンティウス注解のほか、文法術、ウェルギリウス注解も書いているが、ウェルギリウス注解は散逸して現存しない。ただ、ウェルギリウスの生涯の大半がティベリウス・クラウディウスの《ウェルギリウス伝》に詳しいため、両者が混同され易い。散逸したとはいえ、前世代であるから、ティベリウスがアエリウスの著書を参照、引用した可能性も捨て切れない。むしろ参照したと考える方が自然だ。しかしやはり、『作法』のテレンティウス注解は『アエネイス』の部分を除いて、アエリウスであったろう。[28)]

以上の疑問、問題は専門家の目から見れば容易に解決できると思う。重要だが見落とされている問題もあるだろう。ご教示を賜りうれば幸いである。

参照補足

1)戸張智雄著、『ラシーヌとギリシア悲劇』、1967 年、東京大学出版会、24 頁

2)同、18 頁

3)藤沢令夫訳、1994 年、中央公論社、世界の名著第 8 巻、戸張、『オービニャック師《演劇作法》注解』(4)、中央大学仏文学研究第 21 号、151 頁

4)同『作法注解』(1)、第 18 号、82 頁

5)森進一訳、1975 年、岩波書店、『プラトン全集』第 10 巻、128、129 頁。副題はイリアスについて。本篇の中核にして最も有名な部分で、詩人は狂気、すなわち特別な神の恩恵による語りを行うのであり、正しい知識によるのではない、という件り。

6)『作法注解』(2)、第 19 号、69 頁

7)鈴木一郎訳、昭和 41 年、筑摩書房、世界文学体系第 67 巻、ローマ文学集

8)『作法注解』(1)、81 頁

9)同上(4)、151 頁

10)鈴木、同、解題、215 頁

11)柳沼重剛訳、1987 年、岩波文庫、271 頁

12)河野与一訳、1991 年、岩波文庫

13)『ラシーヌとギリシア悲劇』、26 頁、戸張、アミヨ『プルータルコス倫理論集』翻訳考(1)、フランスルネサンス文学第 2 号

14)柳沼重剛訳、1992 年、岩波文庫、493 頁

15)同上、499 頁

16)加来彰俊訳、1984 年、1994 年、岩波文庫

17)松平千秋、中務哲郎訳、1992 年、岩波文庫、454 頁、455 頁

18)同、84 頁、85 頁

19)詳細は 1996 年、1997 年掲載予定、中大仏文研究、『演劇作法』用語集(上、下)に譲る。

20)河野、第 12 巻、182 頁

21)国原吉之助訳、1992 年、岩波文庫

22)中村善也訳、1995 年、岩波文庫

23)堡塁と訳される。

24)河野、第 12 巻、191 頁

25)同上、183 頁

26)J・ダニエルー著、上智大学中世思想研究所訳、『キリスト教史』、1990 年、講談社、第 1 巻、16 頁、203 頁及び The Oxford Classical Dictionary.p.423.

27)服部英次郎訳、1994 年、岩波文庫

28)『ラシーヌとギリシア悲劇』、6 頁